

第十四回和辻哲郎文化賞 学術部門 受賞作

ケイト・W・ナカイ 著『新井白石の政治戦略 儒学と史論』

(2001年8月9日 東京大学出版会 刊)

ケイト・W・ナカイ Kate Wildman Nakai 1942年生まれ。米国カリフォルニア州出身。

専攻は、日本近世思想史。スタンフォード大学東アジア学科卒業。ハーバード大学大学院東アジア文明研究科博士課程修了、ph. D。上智大学比較文化学部教授(受賞時)。現在は上智大学国際教養学科教授。著作は、主著に、Shogunal Politics: Arai Hakuseki and the Premises of Tokugawa Rule(受賞作の原作)、“Women of the Mito Domain: Recollections of Samurai Family Life”(山川菊栄著『武家の女性』の英訳)、他がある。

受賞のことば

新井白石は十八世紀初頭の幕府政治において、将軍を中国儒学の政治理念に則って「王」に変身させようと試みました。さらに、そのプログラムを正当化するにあたり、徳川幕府開府までの日本政治史を儒学の範疇に照らしながら捉え直し、古事記・日本書紀の「神代」の叙述や平安から江戸までの朝廷・武家の歴史を大胆に再解釈しました。その挑戦の足跡を追う経験は、著者にとって、日本の歴史と思想を勉強するこの上もない好機でありました。その白石の挑戦を描いた著書が、このたび日本の文化や政治構造を独特の角度から分析した思想家和辻哲郎の名を冠する賞に選ばれたことを非常にうれしく思い、光栄に存じます。新たに日本思想の研究に取り組む大きな励みにもなります。

英語で書かれた拙著が日本の読者の目にふれ、このような名誉を受ける機会に巡り会うことができたのは、もっぱら翻訳に御尽力下さった三人の先生方一平石直昭・小島康敬・黒住真各氏一のおかげです。この場をかりて、改めて心から感謝の意を表したく思います。

《選考委員評》

深みのある日本思想研究

湯浅 泰雄

ナカイ氏のこの著作はユニークな発想にみちたお仕事である。従来の新井白石研究は彼の儒教理解、神話解釈、歴史観などを取り上げるのが例であったが、ナカイ氏はこれと違って、政治家としての白石の立場と政策に注目して彼の思想を解明する姿勢をとっている。これは外国人としての眼で日本を見る著者の立場がもたらしたものであろうが、外国の日本研究者に時として見られるような表層的、あるいは偏った見方はない。重厚な研究である。これには三人の訳者の方たちが著者と共同研究する形で一々原資料に当たりながら訳を進められたことも力になっている。

白石の政治戦略の基本目標は、将軍を「日本国王」とするところにあった。江戸時代の幕藩体制をとりあげる場合、朝廷の果たした役割は無視されがちであるし、事実、朝廷には権力はなかった。白石はさらに一歩進めて将軍を名実ともにそなわった日本の最高権力者とする戦略をとった。政治家としての彼の地位は江戸中期から発達してきた将軍の個人的ブレンである側用人体制に基づいており、その結果老中を中心とする幕閣との間に対立が生まれた。外国との関係でも、彼の戦略は対馬藩と朝鮮の反撥を買ってうまくゆかない。著者は白石をめぐるさまざまな人たちの動きを詳細に追いながら、彼の思想形成をあとづけている。思想研究と歴史研究がみごとに結びついている。経済政策などは、白石の路線はそのまま徳川吉宗に継承されるが、朝幕関係では皮肉なことに、幕府にとって朝廷の存在をあらためて認識させる結果になった。幕末の大政委任論は、松平定信によって国学の影響をとり入れて生れてくるものだが、水戸学をも含めた江戸時代の政治思想史に新しい興味がわいてくる。

白石については従来、神話の合理的解釈の先駆者、あるいは史論家としての業績が目まぐるしく注目されてきたが、その背景にあった政治家としての経験をくわしく知ることができ、立体的深み

のある日本思想史研究にめぐり会ったことを嬉しく思う。

坂部 恵

これまでの江戸時代思想史研究では、ともすれば儒学思想の内発的展開に主眼がおかれ、その観点からすると新井白石は、その開明性と視野の広さからして重要ではあるが規格に外れる傍流と位置づけられたり、むしろ幕政のさまざまな場面で重要な役割を演じた実際政治家的な面から注目されたりしてきたきらいがある。著者は、しかし、幕政の展開の実際の状況のなかでの政治戦略を指標としながら、対朝廷関係、朝鮮使節の処遇等々、その都度の問題への対処にそくして検証され打ち出されて来る白石の思想形成の現場にたえず測鉛を下ろしながら、現実とのきわめて密接な接触のなかで展開される白石の思想の生きた姿をさながらに取り出して見せる。

その結果、ごく若い修行時代の『資治通鑑』への熱い関心から、後年の『読史余論』等における公家支配から武家支配の時代にかけて展開される日本史への関心まで、生きた歴史の動きにたいする白石の感受性がおのずからクローズ・アップされる。歴史の変動のただなかに身を置き、ときに実際政策を動かす立場にあって身を処しながら、歴史の帰趨を見定める史家、史論家としての白石。この白石像は、多くの言語と異文化に興味をもち、とりわけ歴史・文化にまつわることどもを語ることばの用法・考証にきわめて敏感・厳格な「人文主義者」ないし「文人」としての白石像とオーヴァー・ラップする。徳川将軍に実質・名目両面での王権を統一することを志向する白石の構想の叙述には、以後の日本の歴史の展開のなかでついで実現されることのなかった可能性が垣間見られ、いたくわたくしどもの想像力を刺激するものがある。このあたりにも外部の視点からする日本研究ならではの利点が生かされているとあってよいだろう。

現実感覚と先見性の達人

濱井 修

優れた政治思想家の資質が、鋭い現実感覚と現実の問題を解決するための方途を示す能力にあること、これは古来人々の認めて来たところである。本書は、徳川時代に現れた新井白石がそうした能力と資質の持ち主であるという見方に立って、彼の政策と思想の両面にわたり、その「因習打破的」な性格の内容を追求した力作である。

著者によれば、従来の白石研究は、彼の政治的思想的営為が徳川時代の政治体制の発展に棹さした側面に注目する研究者と、彼の政策や学問の孤立性ないし特異性に注目する論者との二分されて来た。しかし重要なのは、彼の政策や思想が、その周辺性・特異性にもかかわらず、徳川政治の発展の中で果たした役割に注目することである。この視点から見ると、白石の経綸は、一方で「権力」を諸藩と分有し、他方で「権威」を天皇と分かちことによって成立していた幕藩体制の二元的支配を打破して、「国王としての将軍」に権力と権威を一元化することに集中していたことが判る。また彼の頑なまでの儒教思想へのこだわりも、専らこの目的のためであったことも明らかになる。

こうした白石理解を論証するために著者は、白石本人の著作はもとより、彼を取り巻く政治状況と思想的環境を窺わせる多くの資料を詳細に分析検討する。その結論を一口に言えば、白石の試みそのものは失敗に終わったが、その施策が形を変えて将軍吉宗に受継がれた、その意味で彼の政策と思想は「弁証法的」に幕府の政治の発展に寄与した、というのである。

本書は近世日本の「巨象」新井白石の思想と経綸に新たな光を当てることにより、徳川時代の政治体制の発展のあり方と、その中で果たした儒教の役割について、これまでの研究で見落されていた側面の理解を与えてくれる。入組んだ事実と意味連関を解きほぐす緻密な論述を進めながら、読者に思想史探求の楽しさをも味わわせてくれる優れた作品である。